

忙 申 閑

いよいよ大阪・関西万博が開催されますが、私にとっての万博といえばEXPO'70、昭和45年の大阪万博です。私は当時8歳で記憶も不確かですが、両親に連れて行ってもらい、それが非常に大きな世界的イベントであることを子どもながらに感じました。「夢の21世紀」を体験できると思っていたのでしょう。

当時、外国人を見ることは非常に稀で、インバウンドで溢れかえった大阪など想像できませんでした。その時代に、世界各国が大阪に集まり、パビリオンを建て、最新の技術が披露されていました。中でも一番人気だったのはアメリカ館です。アポロ11号が持ち帰った月の石が展示されていまし

たが、長蛇の列で入場に数時間かかり、私達は行くことを断念しました。

そういった状況の中でも、印象的な体験がいくつかありました。まずはムービングウォークです。「動く歩道」と呼ばれ、21世紀には街中に設置されているだろうと勝手に想像していました。

入場の際には、“迷子ワッペン”なるものを胸に付けました。親用と子ども用のワッペンがあり、迷子になった場合は、親と子のワッペンの番号を照合し、テレビ電話で確認するという、当時としては最新のシステムだったそうです。

テレビ電話と言えば、どこかのパビリオンで実際に体験することができました。将

大阪万博の思い出

広報委員 弓崎 恭俊

来的にはテレビ電話が当たり前になるだろうと思い、今では想像できないような大きな受話器を持ち、ブラウン管の向こうに映る家族と会話を交わし、大喜びしたことを覚えています。

日本館では、リニアモーターカーの模型がぐるぐると走行していたのが鮮明に記憶に残っています。ほかにもオーストラリア館に入場したと思いますが、詳細は覚えていません。ただ、その近くにワニ料理を提供する店があり、「オーストラリア人はワニを食べるのか？」と驚いた記憶があります。

そして、現在でもシンボリックな「太陽の塔」ですが、その内部には高さ41メート

ルの「生命の樹」が展示されていました。樹の幹や枝には大小さまざまな生物の模型が取り付けられ、アメーバなどの原生生物から、爬虫類、恐竜、そして人類に至るまでの生命の進化の過程を表現していたと記憶しています。とても幻想的な空間でした。

振り返ってみると、当時は高度経済成長の真ただ中で、技術が日進月歩で進化したし、「夢の21世紀」への期待と希望に満ち溢れていました。今回の大阪・関西万博は、少子高齢化が進んだ令和の時代に開催されます。再び、私達に夢と希望を与えてくれることを願っています。